

1 指定物件の表示及び所有者

指定区分	有形文化財
種別	典籍
指定名称及び員数	江月宗玩筆墨蹟之寫 47丁
所在地	福岡市博多区千代四丁目7番79号
所有者	宗教法人 崇福寺 代表役員 岩月 海洞

2 概要

【形態・員数・法量等】

『断簡一部 其ノ八』 1冊 22丁 約31.0×26.4cm

『江月宗玩墨蹟之寫 三十四頁分』 桐箱にまとめて保管 未表装 17丁

掛幅装 5幅 5丁

断簡 3丁

【内容等1】

『墨蹟之寫』は崇福寺中興の祖、江月宗玩(天正2、1574～寛永20、1643)が筆録した、慶長16年(1611)秋38歳の時から、寛永20年(1643)70歳の示寂に至るまで33カ年にわたる「禅林墨蹟鑑定日録」とも評される墨蹟の記録である。

鑑定された墨蹟は宋元墨蹟、大徳寺・五山諸寺什宝・大名物から洛中・大坂・堺・奈良・博多・江戸の町衆の秘蔵品におよび、披見した墨蹟(禅画・古文書も含む)を写し、持参者・所蔵者・表具・法量・真偽・伝来等につき記されている。

採録点数は膨大(およそ3500点)であり、現在では散逸した墨蹟等も多数記録されており、禅宗史・茶道史・美術史上ひいては広く中世文化史研究に欠くことのできない史料価値を有する

平成8年度、49冊が福岡市の有形文化財に指定された。その内訳は「墨蹟之写」40冊、「聚光院什物墨蹟写」1冊、「断簡」7冊、「大僊院什物墨蹟写」1冊、以上49冊。墨付2257丁。法量は各、縦約30.7cm、横約23.4cm。

『墨蹟之寫』は昭和25年(1950)夏、崇福寺を訪れた玉村竹二氏、今枝愛真氏により、輪蔵から発見され学会に紹介された。昭和51年(1976)、竹内尚次氏によって元和九年分(20冊分)までが『江月宗玩 墨蹟之寫 禅林墨蹟鑑定日録の研究 上』(国書刊行会)として公刊されている。

今回指定案件とするものは、前回指定当時把握できなかった墨付47丁分である。形態は「断簡其ノ八」

としてまとめられた1冊、掛幅装5幅、「江月和尚墨蹟寫 三十四頁分」と箱書きのある未表装のもの、及び断簡3丁である。

【内容等2】

『断簡一部 其ノ八』には、雪舟を中心とした画系図である「画師的伝宗派図」を収める。これは昭和38年(1963)、源豊宗氏「等伯画説綜説及註解」において初めて紹介されたとされる(山本英男「江月宗玩筆録の「画師的伝宗派図」について」武田恒夫先生古稀記念会『美術史の断面』清文堂 1995.1.31)。以後、「江月和尚手記貼交屏風」の名で通称されたようである。尚、これに前後する形で、裏辻憲道氏は講演の中で「しかしわかりますことはこのノートには今、何々家にある有名なあの絵だというようなものがありますし、今はすでに見ることのできないものもあつて、大変なものなのです。私が今何を申し上げようとしているかといいますと、その紙の朱書の十六と十七に係図のところがあります。崇福寺ではどうしたことかその中の七八枚を屏風に貼つてあります。その中にこの系図もあるわけですが、それには「画師的伝宗派」図という見出がつけられています。」と紹介され、当時の「江月和尚手記貼交屏風」の様子が伝えられている(裏辻憲道「水墨画の系譜-江月和尚の手控-」西日本文化 第8号 1964.1.10)。かつて屏風仕立ての一部になっていたものであるが、前回指定の時には確認できなかったものである。

【内容等3】

『江月和尚墨蹟寫 三十四頁分』(四十七丁オ)と推定される「靈石如芝墨蹟」の評注に「九月廿五日、等益持参候、中國衆之所持之由被申候、可爲正筆ト申候。」とある。等益の父等顔は毛利家御用絵師、一五八八年、筑前に移封された小早川隆景の名島城の襖絵「梅に鴉図」(京都国立博物館)を画いたと伝えられる。等益は移封した萩藩毛利家の御抱絵師。いずれも「画師的伝宗派図」(『断簡一部 其ノ八』十六丁・十七丁)にみえるとともに、評注から江月宗玩と等益との間に往来・面識があったことが示唆されている。

3 指定理由

『断簡一部 其ノ八』(1冊22丁)、『江月宗玩墨蹟之寫 三十四頁分』(未表装17丁)、掛幅装(5幅5丁)、断簡(3丁)の計47丁は、その評注と丁数の連続から、寛永三年(1626)六月下旬～十二月上旬のものと考えられる。

この年、二代将軍徳川秀忠の御台所崇源院大夫人が薨去し(九月十五日)、江月宗玩はその葬儀に大徳寺住職として参列している(「欠伸稿」『大徳寺禅語録集成』所収)、『欠伸年譜草』大徳寺竜光院所蔵)。

『江月宗玩墨蹟之寫 三十四頁分』五十七丁-オに見える「於江戸見申候」の評注はそのことを示している。

慶長16年～寛永20年まで本来48冊あったと考えられる『墨蹟之寫』(『聚光院什物墨蹟写』1冊、『断簡』7冊、『大徳院什物墨蹟写』1冊を除く)は、現在、元和三年・中上の冊、元和四年下の冊、寛永二年の冊、寛永三年の冊、寛永五年・下の冊、寛永八年の冊、寛永十年の冊、寛永十一年の冊、以上8冊分が散逸しているが、本墨蹟40丁余はその欠落した寛永三年の後半部分を補うものである。

全体およそ2400丁のうちの40丁余とはいえ「画師的伝宗派図」その他とともに、禅宗史・茶道史・美術史上ひいては広く中世文化史研究に多大に寄与するものである。



崇福寺『墨蹟之寫』福岡・崇福寺
蔵 写真/福岡市教育委員会

2009. 3. 12 『墨蹟之寫』現況

『週刊朝日百科 日本の国宝』020 より (1997. 7. 6)



軸装の5幅



『江月和尚墨跡寫 三十四頁分』





上『江月和尚墨跡寫 三十四頁分』の一部 下『断簡一部 其ノ八』十六・オ～十八・オ



右 断簡十六・オウ
 左下 断簡十七・オウ
 右下 断簡廿〇・オウ

